２０１３年　緊急提言！
国連がパレスチナを１９４番目の
国家として承認

「重大な曲がり角に立つ
イスラエル」

横山　隆

期待を裏切った民主党と忍び寄る日中戦争

ここ数年間、日本の国運が衰退している。３年間の民主党政権が国民の期待を裏切って国を凋落させ、国際的にも日本は孤立している。ロシアによって開発が進む北方領土がロシアの軍事基地として軍隊が駐留し始め、北海道の目と鼻の先に匕首が突き付けられている。北朝鮮は日本に向けてミサイルと核弾頭を向けて攻撃姿勢をとり、日中韓関係の争点となっている竹島や尖閣列島の問題は一触即発、特に中国とは両国間の軍事衝突は避けて通ることが困難な状況になりつつあり、偶発的にも暴発しかねない気配が濃厚である。この原稿を作成する数日前には中国と韓国が会談を行い、一致協力して対日領土問題について協力し合う為の協議を行った。またつい先日アメリカの州議会が旧日本軍の従軍慰安婦問題について日本に謝罪要求を行った。また沖縄の基地問題も解決しそうな気配はない。また原発事故を引き起こした3.11の震災の後遺症は甚大である。民主党政権はこれらの諸問題に何の解決も示すことができないまま、反イスラエル票を投じた直後、政治の表舞台から引きずりおろされている。不毛な政治手法のつけが回ってきたと言えよう。日本の民主党は２０１２年十二月の衆議院総選挙に歴史的大敗北を喫し、国民はやっと悪夢から解放された。２０１２年十一月二六、二七日私たちが東京でＥＣＩ（イスラエルの為のヨーロッパ連合）の方々を招いて「終末とイスラエル」をテーマにした集会を開催し、多くの愛兄姉たちが参集してくださったことは感謝であった。しかしその五〇数時間後ニューヨークの国連総会でパレスチナ自治政府（Palestinian Authority,"PA"）が「オブザーバー機構」という位置付けから「オブザーバー国家」に変更されるという重要な決議が１３８ヶ国の賛成多数で採決され、日本政府はこれに対して賛成票を投じてしまった。これは最終的には「パレスチナ国家樹立」に向けたスタート地点となり、現実に押し切られたのである。このような時にイスラエルも日本も共にオバマ氏に嫌われているということは不思議な一致点であろう。

民主党政権と日本外務省官僚がこのような選択をした背景とは何だったのか？

第一に、野田政権が反イスラエル的な外交方針を打ち立てた理由は対アラブの石油外交であろう。

第二にアメリカの影響から離脱の意思表示をすることにより、十二月に行われる衆議院議員選挙目的の世論を取り込もうとしたかもしれない。アメリカとイスラエルは反対し

ているにもかかわらず、選挙戦のため充分な閣議も行われず、政権末期の無責任な醜態をさらした。

第三は、これが最も重要かもしれない。日本政府の従来の外交基本方針からすると、通常国際的決定をする時は同盟国アメリカとの事前協議があるはずで、外務省官僚もこれを充分に知り尽くしているはずなのであるが、何故に日本は反対票を投じるアメリカに追従しなかったか？中立国スイスも本来なら棄権すべきと思われるが今回は賛成に回り、イギリスとドイツは棄権し、全世界１９３ヶ国参加した国連総会において 136 ヶ国が賛成し、反対は僅か９ヶ国、４１ヶ国が棄権、残りの国々は投票に加わらなかった。さらに２０１１年九月二三日の国連決議文書の中には、「国連はパレスチナ人の民族自決と１９６７年以来占領されているパレスチナの地（イスラエル）に自らの独立国家を建設する彼らの権利を改めて承認する」と述べられている。パレスチナ自治政府は今回そのステータスが国家に引き上げられたことにより、パレスチナ自治政府がイスラエルの行為を戦争犯罪としてハーグの国際刑事裁判所に訴える道が開けたといわれている。アメリカが表面的には国連総会の「パレスチナ格上げ」に関し反対の立場をとってはいるものの、オバマ大統領の本音は反イスラエルであり、イスラエルに対して諸国民に働きかけてパレスチナ国家の樹立を阻止しなかったためと考えられる。即ち影の仕掛け人はアメリカ合衆国大統領のオバマ氏であると言えよう。共和党のロムニー氏が当選していたら絶対にあり得ない選択であった。今後オバマ氏の大統領任期中に、パレスチナが正式に国家として誕生することになる可能性は否定できない。尚、イスラエルと米国以外にパレスチナをオブザーバー国家として承認することに反対票を投じた国々は、カナダ、チェコ、ミクロネシア、ナウル、パラオ、パナマ、マーシャル諸島などであった。これは不思議な現象である。アメリカの威信が世界的に地に落ちてしまっている有力な証拠であると同時に、これはアメリカの謀略であろう。オバマ氏は外交が不得意で軍産複合体としてのアメリカの国の勢いを貶め、やがて末期的症状を来たらせる人物としての評価が高い。やがて世界の警察国家、覇権国家としてのアメリカの姿は消滅し、アメリカ合衆国は次第にイスラエルの友好国でもなくなり、イスラエルはますます孤立していき、世界各国からパレスチナ問題を巡る攻撃が始まるだろう。イスラエルは今、大きな岐路に立っている。

ユダヤ人にも大きな責任がある。

ユダヤ人には三千数百年前からイスラエルの国土を死守すべき神との契約が存在している。その故に神と契約した国土の中に異教国家を樹立することなど論外である。しかしＡＦＰ電２０１３年一月七日の世論調査によると、イスラエル日刊紙イスラエル・ハ・

ヨム（Israel Hayom）が８００人以上を対象に行った調査では、「二国共存：即ちイスラエルから独立したパレスチナ国家の創設という考えに賛成か反対か」と質問した。すると回答者の５４％が「支持する」と答えた。「反対する」と答えた人は３８％に過ぎず、残りは無回答だった。イスラエルが目先の闘争を迂回して偽りの平和を選び願うならば、歴史的に亡国をまたも繰り返し体験することになる。イスラエルは今月二二日に総選挙を控えており、次期連立政権を構成するとみられるベンジャミン・ナタニエフ首相率いる与党リクードと極右政党「わが家イスラエル」Yisrael Beitenu は支持率を下げているという。

オバマ氏はイスラエルに対し一昨年、１９６７年（六日戦争）の停戦ラインまでの撤退を要求した。これはエルサレムの帰属問題に発展する重大な発言であった。イスラエルはオバマ氏を嫌うあまり、昨年十一月の米国大統領選挙でロムニー氏を支持したことによって、オバマ氏との関係が悪化したことがうかがわれている。二期目に入るオバマ氏は共和党の元上院議員であるチャック・ヘーゲル氏を国防長官に任命したが、ヘーゲル氏は米国の戦略がイスラエルに牛耳られ、イスラエル支援のための戦争ばかりしている状態を止めさせようとしている急先鋒でもある。そのため米国のイスラエル右派系勢力はヘーゲル氏の就任に反対してきたが、オバマ氏は動じることなくヘーゲル氏を指名したため、米国議会のヘーゲル氏就任反対勢力の動きが弱まりつつあるという。これはイスラエル在米右派勢力イスラエル・ロビーにとって画期的敗北だといわれている。このようなアメリカ大統領が親イスラエル路線をアメリカから切り離そうとする動きを見て、英国やEUも中東の国々と歩調を合わせイスラエルへの非難を強め始めている。

昨年来、英国政府はイスラエルがヨルダン川西岸の東エルサレム地域で入植を拡大していることを「戦争犯罪（ジュネーブ条約違反）だ」と非難した。

今回パレスチナ自治政府がオブザーバー国家となる第一歩を踏み出したことで、パレスチナが国家として認定された以上、イスラエルが西岸の領土で入植地を拡大し、武力を行使し、威嚇または殺傷することは略奪戦争行為に当たるとし、英国はイスラエルを戦争犯罪の加害者扱いし始めている。これは英国が初めてとるスタンスであるといわれている。「戦争犯罪」を政治的に利用してきた英国がイスラエルを「戦犯」扱いすることによって、国際社会がイスラエルを従来の「善」から「悪」へ突き落としつつある流れが確実に見えてきた。英国のイスラエル建国時の二枚舌外交は今も健在である。ＥＵ（独、仏）も中国、ロシアもパレスチナ国家樹立創設を支持し、反イスラエルになりつつある。日本も然りである。今後二期目のオバマ政権がイスラエル全面支持から撤退し、安保理の「拒否権発動」

を「棄権」と変えるだけで、イスラエルは窮地に追いやられるだろう。イスラエルは2013年以降、さらに激しいアンティセミティズム（反ユダヤ主義）の流れにさらされている。今後イスラエルはアメリカに頼ることすらできなくなり、独自の戦いを想定しなければならないだろう。

２０１２年十一月二九日

歴史的なこの日、国連総会の格上げ決議案は世界中にテレビ中継された。翌十一月三十日、１９４７年の同じ日に国連総会がパレスチナ分割を決議（１８１号）した時から六五年目、パレスチナ国家が初めて誕生した。ムハマード・アッバースＰＬＯ議長はパレスチナ国家の「出生証明」と演説し、会場は拍手と歓声に包まれ、各国代表も立ち上がって拍手した。イスラエル西岸地区とガザ地区の各地では数千人のパレスチナ人が街頭に繰り出し、四色旗を振って国家誕生を祝った。これは神のイスラエルを抹消しようとする世界的謀略がいよいよ檜舞台に上ったのである。

「おとめシオンの城壁よ／主に向かって心から叫べ。昼も夜も、川のように涙を流せ。休むことなくその瞳から涙を流せ。」（哀歌２：１８新共同訳）

今、エルサレムの神殿の丘を巡る攻防は熾烈を極めている。

パレスチナ人のＰＬＯが国家として承認されることが、また一歩国連によって確実に前進した。東エルサレムの神殿の丘がパレスチナ人の領域になるということは考えただけでも身震いするほど恐ろしいことである。ゼカリヤの預言がまた一歩現実味を帯びてきた。神殿の丘がサタンの領域になるために、全世界がこれに協力しようとしている。ＢＣ１０００年ダビデがエブス人からエルサレムを征服してから３０００年経った今、日本の外務省官僚と瓦解寸前の野田内閣は２０１２年十一月のその終わりに、してはならないゼカリヤ預言に手を染めた。これは坂を転がるように凋落した民主党政権の壊滅にさらに拍車をかける神の国の売国的行為であり、天の軍勢たちもエルサレムの攻防に関しては固唾をのんで見守っているのだ。日本の政治姿勢はカオス（混沌）そのものである。そして反ユダヤ的姿勢は全世界、そして日本を覆っている。中東よりのオイルの供給を最優先的に重視することは、遊女的発想（イザヤ１：２１）である。金で買われて不貞を働く契約無視、金を得ることにだけに集中する考え方である。酒に酔った様にろれつが回らず千鳥足で歩いた民主党は、最後にこの重大な無責任極まりない決定を下した。民主党には数人のクリスチャン議員がいたはずだが？この国には神の言葉を標榜するクリスチャン議員はいないのか？今回政権を掌握した自民党はあまりにもひどい政治を行った民主党に国民があきれてしまい、仕方なく選ばれただけで、自民党が優れていたから国民が支持したわけではない。自民党政権が国益重視の反イスラエル路線を走ることがないように祈りたい。幹事長の石破茂氏は聖書を知っているクリスチャンである。また安倍晋三総理は親イスラエルだと云われている。これ以上この国を反ユダヤ主義に落とし込まないような政策を立案してほしい。

全世界は反イスラエルとなって歩調を合わせることとなった。

「見よ、わたしはエルサレムを、周囲のすべての民を酔わせる杯とする。エルサレムと同様、ユダにも包囲の陣が敷かれる。」（ゼカリヤ１２：２新共同訳）

アブラハム、イサク、ヤコブの神と契約したイスラエルの聖なる土地の中に異邦人国家が寄せ集まって謀略を巡らせ、神の領域内にパレスチナ国家という異教国家を設立しようとする大それた悪が、今全世界の中で白昼堂々とＵＮ国連という場を通じて行われようとしている。世界の大国同士が連合して歩調を合わせてはかりごとをもってと神の選びの民、契約の民、イスラエルの土地を搾取する。これは万軍の主、創造主なる神に対して人類の長子として召命を受けたイスラエルとの契約（出エジプト４：２２）を踏みにじる行為である。既に１９２０年サンレモ会議において国際法の上からも、イスラエルの領土問題は解決済みであるにもかかわらず、全世界はこのエルサレム問題の重い石に手をかけ、さらに持ち上げようという悪を行っている。

「その日、わたしはエルサレムをあらゆる民にとって重い石とする。それを持ち上げようとする者は皆、深い傷を負う。地のあらゆる国々が集まり、エルサレムに立ち向かう。その日には、と主は言われる。わたしは打って出て、馬をすべてうろたえさせ、馬に乗る者をすべて狂わせる。わたしはユダの上に目を開いて、諸国の馬をことごとく撃ち、目を見えなくさせる。」（ゼカリヤ１２：３～４新共同訳）

酔いどれの国々はイスラエルに的を絞って剣を研ぎ始めた。

この大きな要因として、ヒューマニズム的ぶどう酒に酔って千鳥足になっている教会にも大きな責任がある。その理由とは、教会には神の言葉が委任されているので、教会はこのようなサタン的企てを暴露し、ストップをかけなければならない神の言葉を知っているからである。今回の国連決議によってパレスチナは国家設立に一歩重要な前進を果たした。よって「パレスチナ国家建国」という「大義名分」が与えられたと錯覚した全世界の国々は歩調を合わせてパレスチナを独立国家として待遇することになるだろう。これは今後のイスラエル外交にとって大きな脅威となり、反イスラエルの急先鋒となるサタンの陰謀、悪しき企てが大きく前進していくと思われる。全世界の国々も民も教会もこれを許してはならないし、パレスチナ国家が設立するための賛成票を投じた我が国日本の拙劣な外交は神の審きを招くこととなるであろう。これは日本の大正時代の政治家たちが、１９２０年サンレモ条約に署名し、イスラエル建国の重要な布石を打った事実とは何という大きな違いなのであろうか。対アラブ外交を優先する経済重視の政策は祝福を

さらに失い、国益追求という夢想政治家たちの思惑は日本経済を根本的に揺るがし、この国をますます困窮させるだろう。

エルサレムが分割され、神殿の丘がパレスチナ国家の領有となったならば、はたして大天使のショーファーが鳴り響き、メサイアはイスラム教のコーランが鳴り響く聖都にお帰りになるのだろうか？

ダビデが３０００年前にエブス人から勝ち取ったエルサレムは、ダビデとの契約により永遠の都としてイスラエルとの固い絆を持っている聖都である。歴史上かなり長期間、イスラエルとパレスチナ人との間に繰り返されてきた紛争の根源とは何か？この根底には世界の心臓部エルサレム問題がある。アブラハムがイサクを献げたモリヤの山、神殿の丘。これは全世界の贖いの中心軸に位置している。パレスチナ国家というものがイスラエルと神の契約の土地以外に建設されるのであれば、これは何の問題もないし、これは平和的解決法にもなるだろう。しかし事情はまったく違っている。ヨルダン川西岸（West Bank）もまたガザ地区もすべてイスラエルと神の契約された土地の領域内にあるので問題が根深いのである。特に神殿の丘を含む東エルサレムの領有に関して、これがパレスチナ国家の首都になった時には大問題が発生し、近未来の破局（catastrophe）に繋がるだろう。

燃え上がるシリア、ゴラン高原から日本の自衛隊撤退。そしてアサド大統領はイスラエル、米国の標的攻撃を命令

２０１３年一月十五日、イランのマスメディアがアラブ語のプレス記事を引用して次のように報じている。シリアのアサド大統領は軍幹部に対し、自分が殺害された場合、特に紅海、地中海地域に展開するイスラエル軍とアメリカ軍の標的を攻撃するようにと命令した。中東は「アラブの春」以来、燃え上がっている。

イスラエルの土地に関してエゼキエルは峻厳な預言をもって警告している。

「人の子よ、あなたはイスラエルの山々に預言して言いなさい。イスラエルの山々よ、主の言葉を聞け。主なる神はこう言われる。敵がお前たちに向かって、『ああ、永遠の丘が今や我々の所有となった』と言っている。それゆえ預言して言いなさい。主なる神はこう言われる。お前たちは周囲の者に荒らされ、踏みにじられ、他の国々の所有となったので、人々の口にのぼり、うわさされるものとなった。それゆえ、イスラエルの山々よ、主なる神の言葉を聞け。主なる神は、山と丘、谷と低地、荒れ果てた廃虚、また周囲の他の国々から略奪され侮られ、捨てられた町々に向かってこう言われる。それゆえ、主なる神はこう言われる。わたしは燃える熱情をもって、他の国々とエドムに対して語る。彼らはみな、心底からはしゃぎ、嘲って、わたしの土地を取り、自分の所有とし、牧草地を略奪した者だ。それゆえ、イスラエルの地に向かって預言し、その山々と丘、谷と低地に語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしは熱情と憤

りをもって語った。それはお前たちが国々から辱めを受けたからである。それゆえ、主なる神はこう言われる。わたしは手を上げて誓う。必ず、お前の周囲の国々は自分の恥を負う。」（３６：１～７）

全聖書の中心的課題とは

クリスチャンがイスラエルの為に祈りエルサレムの平和の為に祈ることはアブラハムの祝福を呼び込む大きな要因となる。それは現在の離散した十二部族のイスラエル民が枯骨の谷に散らばった骨の様になっているので、勢ぞろいして復活して故国イスラエルに帰り、やがてメシアが来られ、イスラエルの土地（契約された土地）に安らかに住まわれ、全人類、全世界に祝福が及ぶことこそが決定的に重要な目的となっているのではないだろうか。これは聖書の中心的「的」(focus)であり、この的を外さないように祈りたい。今イスラエルは重大な岐路に立っている！！

エルサレムの平和を祈る会事務局
日本メシアニック親交会主管